

伊勢市教育長賞

『ぼくのおじいちゃん』を読んで

なんぺい さら

浜郷小学校 三年 南平 彩良

わたしがこの本をえらんだ理ゆうは、表紙の絵がかわいかったからです。

まずさいしょに、わたしが心にのこったのはおじいちゃんが落ち葉を見ている所です。なぜかと言つと、さびしそうな顔で見ているからです。さびしそうな顔で見ているおじいちゃんを見てわたしもさびしくなります。だから、わたしはおじいちゃんとおに「ご」をしたり楽しくできるような遊びをいっしょにしたいです。きつと、おじいちゃんはわたしのことがもつと大すきになつて、さみしさがなくなると思います。

つぎに、わたしが心にのこったのは、おじいちゃんがほんとにおじいちゃんの時もあるし、ほんとに子どもみたいな時もあるという場面です。わたしはおじいちゃんの時がかつ「いいい」と思います。だけど、おじい

ちやんが子どもみたいな時って、どんなんだろうと思いました。わたしは一度もそんなすがたを見たことがないからしんじられないし、ふしぎな気もちです。わたしの子どもイメージは、まいごになって大声を出してないたり、算数のかんたんな計算をわすれてこまっていたり、おかしがほしいとないてさげんだりするこです。もしおじいちゃんがそうだったら、わたしは道を教えたり、やさしく計算を教えてあげたり、おかしは買ってあげると思います。

そのつぎに、わたしのことがわからなくなつちやうこもあるのかな？と思うと、わたしはかなしくなります。わたしが「おじいちゃん」とやさしく声をかけたらおじいちゃんはわたしのことをわかってくれると思います。なぜかと言うと、おじいちゃんわたしのことが大すきで、わたしもおじいちゃんのことが大すきだからです。

さい後に、わたしはおじいちゃんが、も

し子どもになつてしまつても、わたしはお
じいちゃんのことが大すきです。